



文化と文化が融合して新しい価値が生まれる。
そんな肉体表現を作品化していきたいですね。

スペイン舞踊家◎ 蘭このみさんインタビュー

坂口安吾の「桜の森の満開の下」をモチーフとした「桜幻想」という作品で文化庁芸術祭の大賞を受賞するなど、独自の作品が高い評価を得ているスペイン舞踊家の蘭このみさん。ご両親の出身地、柏崎が地震の際には現地に駆けつけ、復興のために何か役に立ちたいと感じたと言います。この度は、柏崎市での公演を控えた蘭さんを訪ね、スペイン舞踊の魅力や新潟への想いなどをうかがいました。

ご両親が柏崎出身ということですが、蘭さんにとって、柏崎とはどんな存在なのですか？

私は東京出身なのですが、祖父母も両親も柏崎に育ち、小さな頃から夏休みなどで何度も訪れていましたので、第二のふるさとです。お墓参りも欠かせませんし、訪れるとなぜか心が落ち着きます。今回の公演もサブタイトルに「ふるさとにいかれて」と入れさせていただいているのですが、そういう気持ちで踊ります。

柏崎市は中越沖地震によって、大きな被害を受けました。

そうですね、あの時のことを思い出すと、今でもゾッとします。テレビのニュースで、柏崎に大きな地震と聞いて、祖父母の家や知り合いの家のことが心配で、いてもたってもいられなくなり、柏崎に来たのですが、惨状を目の当たりにして呆然としました。もっと早くに何かお役に立てないかと思っていたのですが、地震で市民会館等も使えなくなってしまいましたし、まずは「復旧」ということでしたので…。今回ようやく柏崎芸術協会さんからのお話で実現いたしました。

今回の公演は、中越大震災や中越沖地震の復興祈念事業ですね。

今回は、私自身ボランティアとして参加していますが、私が主宰するスペイン舞踊団のメンバー

も大勢ボランティアとして参加してくれまして、心から復興を願っています。私たちの公演を見ていただき、少しでも安らぎのひと時を共有できましたらうれしいですね。

そもそも蘭さんがスペイン舞踊に取り組んだのはなぜですか？

もともと、歌や踊りが大好きで、バレエも習っていましたし…。高校時代はダンス部で、熱を出して学校の授業は休んでも、夕方の部活にだけは行く(笑)というくらいダンスが好きで…。そういった道に進みたいと思ったときに、両親から「芸能界はダメだけど、宝塚ならいい」(笑)と言われ、宝塚歌劇団に入団しました。宝塚在籍中に1年間スペインへ留学する機会をいただき、本場のフラメンコに触れて衝撃を受け、スペイン舞踊を専門にやりたいと思いました。帰国後に宝塚を退団し、この道へと進みました。

スペイン舞踊のどんなところに惹かれていったのですか？

高校生の時に初めて見たフラメンコの舞台に感動したことは今でも忘れられません。その時は、バレエにはない独特の身体の使い方とほとぼしる情熱に感銘を受けました。フラメンコはそもそもスペインの少数民族の*ロマが、自らの民族や家族を慰めるために、踊り継がれてきた文化なので、その内なる精神性、魂が湧き出てくる感覚とか、踊りひとつひとつをとっても無駄がなく、演出

されていない肉体表現の素晴らしさや、リズムに乗っていく感覚、すべてがつながってひとつの表現になっているんです。言葉で表現するのは難しいのですが、留学したことで、一層スペイン舞踊に魅せられるようになりました。

留学中のエピソードなどはありますか？

スペインに渡って初めて、現地のスペイン人たちの中にあるフラメンコ観と私が抱いていたフラメンコへのイメージに大きなギャップがあることを知り、カルチャー・ショックを受けました。私は、フラメンコはスペインを代表する踊りだと思っていたのですが、首都のマドリードにいるスペイン人にとっては、フラメンコというのは一地方の踊りでしかないんです。また、当時のスペインではまだ市民権を得ていない*ロマも多く、少なからず偏見もありました。彼らに言わせると「なんで、あんな少数民族の踊りを日本人がわざわざ習いに来るのか？フラメンコのどこがそんなに素敵なのか？」という感覚なんです。

でも、現地で学んだフラメンコには日本で学んでいたものとは違い、さらに強く惹きつけられました。うまく表現できないのですが、スペインのフラメンコは「乾いて」います。それはスペインに吹く風、湿度など風土に影響するところが大きいと思うのです。日本人はその「乾いた」感じをうまく表現することが難しい。湿った風というか、日本の表現は演歌がそうであるように「しっとりした」感じがあ